

## RSL センター5 年目を振りかえって

RSL センター副センター長  
原田 晃樹

RSL センターは創設から今年度で5 年目となった。この間、専従の助教のほかに、教育研究コーディネーターが2 名配置されるなど、組織の拡充が図られてきた。他方で、新型コロナウイルス感染の影響により、授業が前面オンラインになるとともに課外活動の大半が中止になるなど、サービスラーニングの活動にとって大きな逆風が吹く1 年となった。しかしながら、そうした中でも、スタッフは日々変化する状況の中で臨機応変に対応し、オンライン授業を円滑に実施できるようにしただけでなく、実習においてもオンラインでの実習を成功させるなど、新しい試みをなした1 年でもあった。

2020 年度のRSL 科目は、このような困難を抱えながらも、延べ721 人が受講した。これは、学部生総数の約4%に相当する。この報告書には、センター主管の講義系・実践系・演習系あわせて15 コマの授業についての概観をはじめRSL センターの今年度の活動概況が記されている。量的には、全学部生の4%の受講となるが、学生の受講後の感想は文字通り千差万別である。各自のRSL 科目受講体験が、その後の自分自身の履修計画のなかで、学びを深め、この時代に、この社会に自分が生きていることの意味を確認し、深め、さらには次の世代へより良い社会を持続的に発展させながら継承していくことを考える契機となることを期待してやまない。

ところで、RSL は「全学共通科目」に位置づけられており、RSL 固有の科目枠にはなっていない。それでもあえてRSL 科目として表記し、現場での体験を重視しているのには2 つの理由がある。一つは、大学での学びは、社会とつながる経験を通してより深く理解できるようになると考えているからである。講義など座学での学びを深めた上で実習にのぞむと、新たな発見や気づき生まれやすくなる。これは、自分なりの物の見方や捉え方を講義で学んだからである。逆に、実習を経た上で講義を受けると、抽象度の高い内容であっても、その意図や内容をより深く理解できるようになる。そうした学びを目指しているのである。

もっとも、それだけでは、折角学んだ内容も自分だけの学びにとどまる。理論と実践の両方で得た知識や気づきを、誰かと共有して社会に働きかけることが重要である。そのことが、ほんの少しであっても、「現実」を変える力につながるのではないかと、またこれからの社会人として必要な力なのではないかと私たちは考えているのである。これが、もう一つの理由であり、同時に、RSL センターがボランティアセンターと一体的に運営されている理由でもある。

立教サービスラーニング (RSL) は、正にこうした立教が歩んできた歴史を背景として、それを今日の状況にあわせて理念を具現化しようとする試みの一つなのである。立教サービスラーニング (RSL) 関連科目は、本学のカリキュラム総数のうちのごく一部を占めるに過ぎない。現状では、この科目群を履修しないまま卒業してしまう学生の方が圧倒的に多い。学内での認知度もまだまだ低い。正課外活動や学部教育との有機的な連携をどう構築させていくかということも今後の課題として残されている。ただ、少しずつではあるが、さまざまな壁に突き当たりながらも、担当するスタッフの尽力により内容の改善が図られてきている。改めて、スタッフはじめ関係者の皆様方に感謝申し上げる次第である。